

「終わりに近づくときのしるし (2)」

マルコの福音書 13:14~20

はじめに

前回に続き、イエシュアが語られた「終わりに近づくときのしるし」についての預言を今回も取り上げていきます。今一度念を押しておきますが、ここで語られている内容はすべて「終わりのときのしるし」ではありません。「終わりに近づくときのしるし」ですのでくれぐれも誤解のないようにお願いします。今のこの世界、この時代が終わりに近づくと時、神は一体どのようなしるしが表わされるのか、どこで何を起こされるのか、イエシュアはこれを「宮に向かって（マルコ 13:3）」預言されました。つまりそのしるしとは、大前提としてエルサレムの神殿と密接な関係があるということです。そしてやがて「荒らす忌まわしいもの」と呼ばれる存在がそこに入り、そして立つことをイエシュアは預言されました。これは旧約聖書のダニエルの預言と結びつくものです。

ダニエル書【新改訳 2017】

11:21 …一人の卑劣な者が起こる。彼には国の権威は与えられないが、不意にやって来て、巧みなことばを使って国を奪い取る。

11:22 彼の前では、洪水のような軍勢も、契約の君主さえも一掃されて打ち砕かれる。

11:31 彼の軍隊は立ち上がり、岩である聖所を冒し、常供のささげ物を取り払い、荒らす忌まわしいものを据える。

また新約聖書では使徒パウロがこの出来事を「まず背教が起こる（Ⅱテサロニケ 2:3）」と預言し、使徒ヨハネは黙示録の中で「獣を拝むようになる（黙示録 13:8）」と記しています。A.D70年、ローマ軍によって破壊されて以来、今日もおイスラエルの首都エルサレムに神殿「聖所」は建て直されておらず、「常供のささげ物」をはじめとする神殿礼拝も未だ回復してはいませんが、ダニエルの、そしてイエシュアの、使徒たちの預言が成就するためには、このエルサレム神殿の再建は最重要必須事項です。その準備が水面下で着々と進行しているという情報もありますが、その実現がいつなのかはまだ分かりません。しかし聖書に記された預言はすべて、その時が来れば必ず成就しますから、時間の問題と言えるでしょう。実際に存在しないものを汚したり、行われていないものをやめさせることはできません。前回の 13:2 でイエシュアはその時実際に見ておられた宮が、やがて完全に破壊されることを預言しながらも、「終わりに近づくときのしるし」のために、宮はもう一度再建され、神殿礼拝の回復がなされることを当然のこととして、それらが「荒らす忌まわしいもの」滅びの子、獣、反キリストとも呼ばれる存在によって再び汚される、破壊されることをここに預言しておられるのです。それでは今回の箇所に記載されたイエシュアの預言を、いつものようにヘブル語の視点で読み解いてまいりたいと思います。

1. 山へ逃げなさい

マルコの福音書【新改訳 2017】

13:14 『荒らす忌まわしいもの』が、立ってはならない所に立っているのを見たら——読者はよく理解せよ——ユダヤにいる人たちは山へ逃げなさい。

13:15 屋上にいる人は、家から何かを持ち出そうと、下に降りたり、中に入ったりしてはいけません。

13:16 畑にいる人は、上着を取りに戻ってはいけません。



イエシュアは「荒らす忌まわしいもの」がエルサレムの神殿において「立ってはならない所に立っている」つまり人が立ってはならない、神が立たれるべき場所に立つ、すなわち自分を神とするその時、「山へ逃げなさい」と忠告しておられます。この山とは一体どこの山でしょうか。それはこの時イエシュアが宮に向かって座っておられたオリーブ山のことだと考えられますが、この預言が成就するその時のオリーブ山に逃げたとしても、実際にエルサレムから1 km も離れておらず、標高も 800

m前後と大して高くもないこの山は、決して安全な場所ではないでしょう。ですからイエシュアが言われたオリーブ山とは「イエシュアが座っておられるオリーブ山」でありイエシュアがともにおられるオリーブ山のことなのです。この山は、十字架の死からよみがえられたイエシュアが、天の上って行かれた山（使徒 1:12）です。つまりそれはイエシュアとともに天に引き上げられること、すなわちイエシュアの空中再臨による教会の携挙（I テサロニケ 4:16～17）を指し示すものだと考えられます。そして続けざまにイエシュアは「屋上にいる人は、家から何かを持ち出そうと、下に降りたり、中に入ったりしてはいけません」とも言われましたが、この「屋上」という箇所に使われているガーグ(גַּרְגָּוִי)とは本来、モーセの幕屋の至聖所に置かれた金の香壇の上部（出エジプト 30:3）を指す言葉で、それは純金で覆われ、香の煙を神の御前に立ち上らせるためのものでした。つまりこの「屋上にいる人」とは、イエシュアの十字架の血でその罪を覆われ、神の御前に立ち上っていく聖徒、すなわちイエシュアによって携挙される人を表したたとえであると考えられます。携挙される人は空中に引き上げられるので「下に降りたり、中に入ったり」することがないのです。



またさらにイエシュアは「畑にいる人は、上着を取りに戻ってはいけません」とも言われましたが、「畑」という意味のサーデ(הַרְדֵּי)は本来「野」と訳され以下の箇所でも最初に使われました。

創世記【新改訳 2017】

2:4 これは、天と地が創造されたときの経緯である。神である【主】が、地と天を造られたときのこと。

2:5 地にはまだ、野の灌木もなく、野の草も生えていなかった。神である【主】が、地の上に雨を降らせていなかったからである。また、大地を耕す人もまだいなかった。

このようにサーデは本来「野の灌木…野の草」と訳され、それは「地には…いなかった」とあるように、地上に存在していないもの、またその状態を指し示す言葉であると考えられ、つまりこの「畑にいる人」とは、携拳され、もはや地上には存在しなくなった人、取り去られた人を表していると考えられます。ちなみに畑は刈り取り、収穫の場所でもあり、携拳は農夫が麦を収穫する様子にたとえることができます。ですから「畑にいる人」とは、携拳によって収穫される麦のような人を表しているとも言えます。また携拳される人は子羊イエシュアの血によって白くされた服を着せられることになるので(黙示録 7:13~14)「上着を取りに」行く必要はないのです。

このようにイエシュアが言われた二つのたとえはいずれもイエシュアの空中再臨によって携拳される人々を指し示したものであると考えられ、「屋上にいる人」のたとえはモーセの幕屋、聖所と関りがあることからイエシュアを信じたユダヤ人(メシアニック・ジュー)、そして「畑にいる人」とは、家の外にいるということから私たち異邦人の教会をそれぞれ指し示しているとも考えられます。

またイエシュアは「…山へ逃げなさい」「…下に降りたり、中に入ったりしてはいけません」また「…取りに戻ってはいけません」などと、まるで人に命じておられるように受け取れますが、これは以前にも「神のご命令」の概念についてお伝えしたことで、イエシュアの命令は神のご命令であり、人のそれとはまったく異なり、神のご命令は創造主としての神の絶対的權威によるものです。この天地万物がそのご命令によって、まったくその通りに造られたように、これを聞く者に選択の余地はなく、必ずその通りになります。もし神のご命令に逆らえる者がいるとしたら、燃える火の池に行けと命じたところで絶対に従わないでしょう。つまり神のご命令には誰も逆らえないのです。ですからイエシュアのこの命令口調、命令的表現は、必ずその通りになる、起こる、成就する、定められているという意味を持った神のご計画の絶対性、確実性の表現であると考えられます。この神のご命令の概念について、人のそれとは決して混同しないように、誤解のないようにお願いします。でなければ私たちの意思選択による行動が、人の行いが携拳される条件のようになってしまい、人は自分の意志と行いによって救われ、神のご計画は人の意志によって影響を受ける不確定、未確定なものということになってしまいます。携拳ばかりでなく神のご計画はすべて、ただ神の側による一方的なもの、また神の主権による選びによるものです。それが「御心がなりますように」神の御心だけかなるということなのです。

2. 哀れな女たち

マルコの福音書【新改訳 2017】

13:17 それらの日、身重の女たちと乳飲み子を持つ女たちは哀れです。

13:18 このことが冬に起こらないように祈りなさい。

13:19 それらの日には、神が創造された被造世界のはじめから今に至るまでなかったような、また、今後も決してないような苦難が起こるからです。

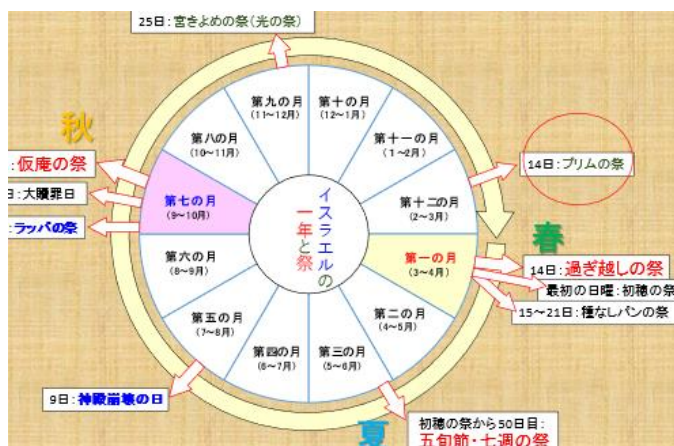
先のとえが携拳を表しているのであれば、この「哀れ」な「身重の女たちと乳飲み子を持つ女たち」とは、イエシュアに携拳されることなく、地上に残されたユダヤ人、イスラエルの残りの者たちを表したたとえだと考えられます。この二人の女性に共通していることは、未婚の女性、あるいは妊娠したことのない女性とは違い、どちらも神が「大いに増す(創世記 3:16)」と言われた、産みの苦しみ、うめきを味

わう存在だということですが、ここで「哀れ」と訳されているオーイ(אוי)は本来、以下の箇所に使われました。

民数記【新改訳 2017】

21:29 モアブよ、おまえはわざわいだ。ケモシュの民よ、おまえは滅び失せる。その息子たちは逃亡者、娘たちは捕らわれの身。アモリ人の王シホンの手によって。

ここで「わざわいだ」と訳されているのが聖書で最初のオーイです。これからは誰か人を呼ぶ時はオーイと言わないようにしましょう、という冗談はさておき…この言葉は「滅び失せる」「逃亡者」「捕らわれの身」という状態を指し示し、イスラエルの民、ユダヤ人たちが「荒らす忌まわしいもの」によってどのような苦しみを受けるのが表されたものであると考えられます。これまでも、また今日もユダヤ人たちは迫害の対象とされ、上記の苦しみを何度も味わわされてきましたが、反キリスト『荒らす忌まわしいもの』が、立ってはならない所に立つ時には、これまで以上の、まさに「神が創造された被造世界のはじめから今に至るまでなかったような、また、今後も決してないような苦難が」彼らを襲うことになるのです。



ここでイエシュアは「このことが冬に起こらないように祈りなさい」とも言われましたが、この御言葉の真の意味を理解するには、イスラエルの季節の祭りを知らなければなりません。イスラエルの三大祭りの一つである過ぎ越しの祭り、これは春の祭りですが、その前の月つまり春の前、すなわち冬の終わりに行われる祭りに、「プリム」という祭りがあります。この祭りの起源はエステル記にあり、

メディア・ペルシャの王クセルクセスの時代に、その側近であったアガグ人ハマンが、後にプリムの祭りの日となったこの日にユダヤ人を根絶やしにしようと企みました（エステル 3:6~7）。結局その企みは失敗に終わったのですが、プリムの祭りとはそもそもそのような、ユダヤ人滅亡の危機を指し示すような日だったので。「このことが冬に起こらないように」というイエシュアの御言葉には、イスラエルの民が苦難の中を通過しても、決して滅ぼし尽くされることなく、救われるようにという祈りが込められていると考えられます。そしてそのことがまさに次の御言葉に表されています。

3. 少なくする

マルコの福音書【新改訳 2017】
 13:20 もし主が、その日数を少なくしてくださらなかったら、一人も救われないうでしょう。しかし、主は、ご自分が選んだ人たちのために、その日数を少なくしてくださいました。

まるで神が当初の予定、計画を変更しておられるかのような表現ですが、決してそういうことではありません。ここで「**少なくして**」と訳されているカーツアル(קצץ)は本来、以下のような意味で使われていました。

レビ記【新改訳 2017】

19:9 あなたがたが自分の土地の収穫を**刈り入れる**ときは、畑の隅々まで刈り尽くしてはならない。収穫した後の**落ち穂**を拾い集めてはならない。

ここで「**土地の収穫を刈り入れる**」と訳されているのが聖書で最初のカーツアルです。つまり神である主は「**日数を少なく**」されるのではなく、その日に「**収穫を刈り入れる**」ということなのです。これは先に述べたイエシュアの空中再臨による携拳によって成就されます。しかし「**畑の隅々まで刈り尽くしてはならない。収穫した後の落ち穂を拾い集めてはならない**」とあるように、収穫されない「**落ち穂**」の存在、つまり携拳されることなく残される者がいる、という意味もこのカーツアルには込められています。このように、**携拳される者と残される者**という、このような形で神は「**ご自分が選んだ人たち**」を取り扱われる、救われるということであり、この方法以外では「**一人も救われない**」という事実が、イエシュアのこの御言葉には表されていると考えられます。

4. 反キリストと携拳

これらのイエシュアの預言、たとえから「**終わりに近づくときのしるし**」とはすなわち、「**荒らす忌まわしいもの**」である**反キリストの出現、そしてイエシュアの空中再臨による教会の携拳**のことであると言えます。自分自身を神とし、それを拒む者すべてを滅ぼそうとする反キリストの存在は、ユダヤ人だけでなく私たち教会にとっても、人類全体にとっても大きな脅威となります。しかしその脅威から私たちを救い出すためにイエシュアが来られることもまた事実なので、ここに記された御言葉もやはり良い知らせ、グッドニュース、福音なのです。そもそも救いとは脅威、危機があるからこそ成立するものなのです。安全な場所から安全な場所に移されても、それはただの移動であって救いとは言いません。

そのようなわけでこの「**終わりに近づくときのしるし**」とは、決して恐ろしいものなどではないのです。それどころかむしろ逆に、今か今かと切に待ち望むべき出来事なのです。反キリストだけでなく、この世のすべての苦しみ、痛み、悩みからも解放されて、ついに現実に主イエシュアと相まみえることができるのです。私たちが信じてきたことが決して偽りではなかったこと、真実であったことが完全に証明されるのです。信仰と希望が現実に変わるその時、それはもう何という喜び、何という慰め、何という報いの瞬間でしょう。それを思うと私の胸は高鳴り、ワクワクが止まりません。そして「**主イエシュアよ、来てください。(黙示録 22:20)**」という聖書の最後の祈りが、切実な思いとなってあふれてくるのです。どうぞ一緒に祈りましょう。私たちの「**主イエシュアよ、来てください**」と。主イエシュアの恵みが、信じるすべての者とともにありますように。アーメン